

愁

秋の心は愁と読むけど

風が袖口滑り落ちてく
その冷たさに触れるたびに
ふいに誰かの手の温もりを
思い出しては目を閉じる

一つ二つ灯る街灯
胸の奥の空さ
名前呼ぶほど強くないけど
ただそばにいてほしい

秋の心は愁と読むけど

夕暮れの色濃くなった頃
人恋しさが宿ってくる
遠く聞こえる電車の音が
夜に向かって伸びてく

その響きの中探してしまう
帰ってくるはずない足音
秋の空気は寄り添ってくる
寂しさ隠そうとするたび

そして気づけば蘇ってくる
肩越しの誰かの笑い声
人恋しさは孤独の影が
伸びる時にやってくる

秋の心は愁と読むけど